Nepal Blind Support Association

ネパールの視覚障害者を支える会会報

第１４号 ２００６年２月ネパールの視覚障害者を支える会（NBSA）
NBSA HP ： http://at.sakura.ne.jp/~ilte/nbsa/

主内容：白杖贈呈式/点字ニュース発行/ネパールの情勢/ネパールよもやま話/事務局だより

好評だったＮＢＳＡ秋のスタディーツアー

アンナプルナ連山大展望

Ｍｏｒｉｙａｍａ　Ｍｉｚｕｙｏ（森山　瑞代）

ラッキーなことに私達の今回の旅は天候に恵まれていた。特に感動的だったのは迫力あるアンナプルナ連山に朝日があたり始めると、雪をいただいた白い山々が黄金色に輝きはじめ、ピーンと澄み切った空気の中から朝日に浮かびあがるヒマラヤの大パノラマがあらわれた時。迫力ある名峰群、神々しく、厳粛で声をだすのも惜しい。４回も行って一度も見ることが出来なかった人がいると聞いていた世界一高い山エベレスト。延々と続くヒマラヤ山脈の山々、はてはチベット高原まで飛行機の中からではあるが見ることができた。

ネパールの視覚障がい者を交えた３日間のアンナプルナトレッキング。コンコン、トントン、白い杖の先が石や障害物を確かめる。その動きは的確に石の大きさや形を体につたえてくれるように思われた。上り坂、下り坂、水の流れる石の上でもスイスイと健常者の私よりも早く、オムさんとガネッシュさんの歩きっぷりには感心させられた。（各々サポーターは付いていたが）英語、日本語を上手にあやつりその博識ぶりに、また友好的態度も洗練されていて昔からの古い友人であるかのように思えた。一緒に歩き、喋り、歌い、踊り３日間はアッという間に過ぎた。今回一番の目的であった友好の旅が達成できたことが一番の喜びである。

（写真撮影と本誌への掲載はモデルの許可を得ています）

2005 年　秋の NBSA スタディーツァー　感想

（中山須磨子）

今度こそヒマラヤに歓迎してもらえるかなとのかすかな期待を秘めながらネパールへと向かいました。何度かのネパール。決してヒマラヤは私の前にその全容を現そうとはしないのです。–どころが九州からの女性陣を前にして、その魅力に負けたのかあっさりと甲を脱いだのです。深い深い群青色の空を切り裂くように眼前に現れたヒマラヤの偉容。青と白のコントラスト。神の仕業の凄さ！！。ただ黙するのみ。ああ・・・これがリーダーの云っていた眺望なのだ。ヒマラヤに酔いつつ、なぜかカトマンズの喧噪を思ってしまうのです。ネパールのこの妙なバランス。ネパールは私を捕らえて放そうとはしないのです。

では駄句を二句。

灰流す儀式見ている輪廻かな
ネパールの風プチプルを嘲笑う

（井上美佐子）

カトマンズにて

仏法の香り　立ちこむカトマンズ
寺院ひしめき　祈りし人と車のカオス
いろとりどりの　ヒンズーの神もひしめく
人種のるつぼ　教えの混沌
立ち昇る火葬の煙
残りし灰は河に流れる
北は清冽なる　白きヒマラヤ
南は湿潤にして灼熱のインド
流入した文化は　ここ交易の盆地で混合し凝縮する

不思議なエネルギーが横溢するカトマンズ
またいつの日か訪づれん

ポカラにて

憧れし氷雪の山ヒマラヤ
いま旭を浴び冷然として黄金に輝く
フェア湖はその雄姿を映し
遥かなるその山を脚下に導く
嗚呼　人の命を凍して永遠にする
ヒマラヤのアンナプルナ

白杖贈呈記念式典　2005 年 11 月 15 日カトマンドゥ市

１本の白い杖が人生を豊かに
ネパールの視覚障害者に白杖の夢を届けよう！

会報誌 11 号と昨年 11 月のネットニュースでご紹介したように、ネパールの目の不自由な人々2000 人に、白い杖の配布を開始しました。鹿児島北ロータリークラブを主中心に、台北ピース・ロータリークラブ、地元カトマンドゥのパシュパティ・ロータリークラブ３団体が一体となって、2005 年 11 月 15 日にカトマンドゥ市内で盛大な贈呈式を行ってくださいました。外国からの使節団 26 名に加え地元のロータリアンやＮＢＳＡが招待した視覚障がい者を入れると　推定 120 名の方々がこの記念すべき式典に参加したことになります。会場にはこん棒や、竹の杖を持った人、歩行訓練を受けながらも白杖を手にした事のなかった小中学生が盲学校から詰めかけ、うれしそうに白杖を受取りました。

申請からこの式典まで、1 年がかりの大事業を施行してくださった方々に、再度熱く御礼申し上げます。

活動報告　待望の点字ニュース発行

昨年日本点字図書館とマレーシア盲人協議会から、技術指導及び機材の提供を受け、いよいよ点字ニュースの発行が始まりました。ご存知のように今年の初頭からネパールの政治的情勢が悪化し、せっかくのボランティアの勤労奉仕も通勤が困難な情況に置かれることしばしば。それでも１月４日の点字の日に間に合わせようと、一同一丸となって徹夜をしてがんばりました。ネパールでは記念すべき第一号の発刊。すべての印刷が終わり「いっぱい飲もうか」の声が上がると、ひとりがビールを買いに飛んで行きました。つまみはインド料理のタンドリーチキン（鶏肉の炭火焼）。こんな美味しいビールを飲んだことはない、と一同大感激。この点字ニュースは、都合によりしばらくの間隔月で発行しますが、ネパールほぼ全土に亘って広く配布します。国内でありながら３週間がかりで届いた、という便りも届きました。

揺れ動くか、ネパールの情勢　ー　2005 年後半～2006 年 2 月まで

2005 年 9 月 4 日ネパールのマオイスト派が、ウエッブサイドで一方的に３ヶ月間の停戦を宣言した。一方的停戦と言うのは、これまで交戦中であった、ネパール国王軍と合意なしに戦闘を中止したことである。停戦の理由をマオ派は、民主化への道を模索しネパール国民の平和実現に貢献する。マオ派に対する懐疑的見方を一掃するなどであった。その背景には、インドのニューデリーで行われた、政党党首間会議で採択された「12 項目の共通理解」に、マオイスト派が合意したことにある。

2005 年 2 月 1 日ネパール国王は、政治的クーデターを起こし全権力を掌握した。以降ネパールは今日に至るまで、国王による直接統治が続いている。それまでの政局は、１．国王２．議会政党　３．マオ派というトライアングル・パワーが続いていたが、この「12 項目」は国王の打倒、並びに専制君主政体解体に的が絞られている。それは民主化運動のパワーが、国王ＶＳ議会政党＋マオ派という２極化に変化したことを意味する。マオ派の一方的な停戦以降、一時的ではあったが、少なくともカトマンドゥ内の治安はよくなった。しかし国王軍はマオ派に懐疑的で、攻撃を止めなかったので、当然のように局地戦は避けられなかった。

さらにマオ派は、9 月以降占領地域内でネパールの主流左派政党の活動を容認するなど寛容さを見せ、治安部隊との戦闘も減少した。10 月のダサイン祭前にマオ派は大集会を開催し、多数政党制を認め、一党独裁制を破棄、将来中央政治の主流に乗ることを示唆した。実際にマオ派は本拠地の西部から中西部のポカラ、さらに首都周辺の郡にその中枢を移動しつつある。もしマオ派が中央政治の主流に乗れない場合、大規模な武装闘争の再開は必定と推測できよう。

2005 年 10 月 6 日、選挙管理委員会は政党に対し、2 月 8 日に行われる地方選挙の候補者の登録を求めたが、７大政党は強い姿勢でボイコットを表明。マオ派はボイコットに留まらず、直接妨害行動を行うと公言。12 月に入ると 7 大政党は足並みを揃え、選挙のボイコットと専制君主制打倒を掲げ激しく示威行動を起こし、運動はネパール全土に破竹の勢いで広まった。マオ派は静観を決めたものか、一方的停戦を 2006 年 1 月 1 日までの 1 ヶ月間延長した。ボイコ

ット運動の盛り上がりの最中に、思わぬ流血の惨事が起こった。12 月 14 日、ナガルコットで政府の治安部隊による発砲で、一般住民が 13 人射殺される、という痛ましい惨事は全国民を震撼させた。これの抗議行動の勢いはそのまま選挙へのボイコット運動を盛り立て、マオ派はさらなる停戦を延期せず、1 月に入ると積極的に選挙妨害行動計画を開始。全土の警察署や軍隊の施設などを次々に攻撃。1 月 20 日、7 大政党は、選挙ボイコットの大集会を予定していたが、19 日に政府は一時的に固定電話と携帯回路をカット。翌日は終日外出禁止令を発令し、7 大政党の集会は散会状態に陥った。
マオ派のボイコット・ゼネストが進行する中、歴史上に残る、前代未聞の地方選挙が 2 月 8 日に実施された。直接統治、支持遠く、地方選候補者は議席の半分、対立候補のいない地域は、無投票で当選が決まり、当日の投票率は 21%と低く、国際世論の批判を受けた。日本政府も厳しくこれを非難した。詳しくはＮＢＳＡネットニュース 2006 年 2 月号をご参照ください。http://at.sakura.ne.jp/~ilte/nbsa/）

2 月 13 日、ネパール最高裁は昨年国王が設置した汚職調査委員会は違憲として、即日解散を命じ、禁固 2 年の汚職容疑を受けたデウバ前首相が釈放になった。ネパールにもまだ司法が存在していたことを知らしめた画期的事件と 1 日この話題に花が咲いた。
選挙が終わり、本来なら選挙の妥当性を巡る闘争の第 2 段階に入っているはずであるが、事態はさらに複雑になる可能性がある。諸外国の中には選挙のお粗末な顛末に、遺憾の意を表するだけに留まらず、ネパールのマオ派の処遇を巡り、様々なコメントを出してきたことだ。超大国がマオイストはテロリストであるから「12 項目」からはずせと命じれば、それに賛同するか、賛同しないか政府、政党や人権団体などに動揺をきたしている。某国等は国軍に武器を供給している手前、選挙の正当性を公然と主張する可能性もある。しかし、テレビのインタビューなどを見る限り、一般大衆はマオイストと言えども同国民である以上、和解が可能であると主張する。今後マオイストはネパール国民の敵になるのか、敵の敵は友になるのか、本来ならばネパール自身に判断を委ねたいところである。　　（2006 年 2 月 18 日現在）

ネパールよもやま話①　ネパールの児童労働者ーバスの車掌の多くは 14 歳以下

ネパールの児童労働者の中で、最も危険視さえているのが 14 歳以下の車両の助手や車掌。その割合は総児童労働者の 43.69%に及ぶ。2005 年の調査によると（The Child Workers in Nepal Concerned Center-CWIN）、これらの児童はカトマンドゥ市内の 5,019 台の公共バス、ミニバス、三輪車などで 1 日 12 時間働いている。また運送業に従事する子供のうち 14 歳以下が 28%で最も過酷で危険な仕事を強いられている。その理由は、悪質な労働条件、事故、長時間労働、きちんとした雇用契約もなされないからである。27%の子供が読み書きができず、労働条件の意味すら知らされていない場合もある。その 80%はカトマンドゥ以外の田舎から来ている。児童労働者の日当は 98 ルピー（約 180 円）、月給で 930 ルピー（約 1,800 円）が平均である。「政府は児童労働問題に取り組んでいるが、国家予算は微々たるもの。2009 年までに児童労働の全面禁止を目標に掲げているが、その道のりは未だ遠い」とネパール児童労働問題センター(CWIN)の会長ガウリ・プラダン氏は語った。

さらにこの報告書では、児童労働者の 74%が乗客、交通警官、車両の所有者およびドライバーによって不当な扱いを受けた経験があることを明らかにしている。これらの児童労働者たちの生活は、53%は車の中で寝る。22.8%の子供は自宅に戻る。19.8%は木賃宿に泊まる。3%は寄宿舎へ行き、1.2%は路上で生活している。また、44%は仕事中に怪我をしていることも報告されている。　　（ヒマラヤンタイムズ　2 月 1 日）

（注：日本では、15 歳未満の児童を労働に使用することは労働基準法によって禁止されている）

ネパールよもやま話②　昔は生きたまま焼かれた　ネパールの寡婦

ネパールには様々な女性差別が残されているが、その最たるものが寡婦（未亡人）と言えよう。未亡人とは読んで字の如し、夫の亡き後も未だに死なずにいる人を指し、ネパールでは不浄で災いをもたらした者と見なされる。そこで、妻は家長や親の葬儀に立ち会えず、すべて長男が取り仕切る。夫の死をもたらした悪の根源は妻である、というのだ。

●女は３度生まれ変わる：
女は娘として生まれ、妻として育てられ、最後に未亡人として生まれ変わると言われる。決定権をもつのはすべて男子、女性は子育てと家事にのみ専念するよう強いられてきた。さらに夫の死の原因は妻のせいだとされ、妻が夫を喰った、年寄りの寡婦は魔女とまで言われることが現在もある。南アジアの女性の社会的地位は生まれつき低く、同時に教育程度も低いようであるが、夫が亡くなるとさらに悪くなり、寡婦は不吉な存在に変る。
（カーストや民族により異なるが、仏教にもこのような考え方が反映される場合がある）

●夫の死後一番初めに行われる儀式：
既婚女性の象徴の腕輪やアクセサリーすべて身体からはずされ、赤いサリーを脱がされる。その際両親から受け継いだもの、子供時代からの愛用品などもすべて捨てる。ネパールでは白は不吉な色とされ、寡婦は数年にわたって白装束をまとわねばならない。葬儀の 13 日間ベッドで寝ることが許されず、塩抜きの食事をするなど様々なしきたりがあるが、寡婦の場合はそれ以上に様々な精神的苦痛を強いられる。一番つらいこと、それはこれまでの楽しみをすべて捨てて生きていく決断に迫られること。その結果寡婦は深刻なトラウマや不眠症に陥りやすく、将来の経済的基盤が崩され、不安に悩まされる場合がある。

●若くして寡婦になる女性たち：
ネパールでは未だに早婚の習慣が残り NGO 団体の調査によると、ネパールの 67%の寡婦は 20－35 歳で、平均して 3－5 人の子供がいる。生まれて 20 年間で、結婚、出産、寡婦を経験する女性もいる。この中で高等教育を受けた者は 2%。ほとんどが夫に依存して生きていたので、離別と共に、経済的基盤を失うことになる。また、若い寡婦の場合は家族から性的虐待を受けることもある。
正確なデーターはないが、治安の悪化を反映し、若い寡婦は増大している。

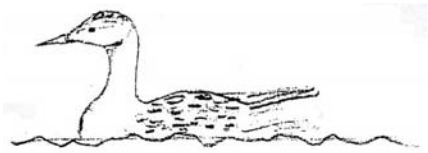
●ヒンドゥー教徒の寡婦
ネパールはインドの影響で、120 年前までサティという法律と文化的影響で、夫の死後妻は生きたまま焼かれた。今日ではこの習慣が禁止されているが、別の形でサティは未だに存在し、風習のすべての変革が必要だろう。今日法的に再婚は認められているが、社会がいまだに許さない。再婚できても相手が病人か老人の場合が多いので、決して好き好んでの再婚とは言えないだろう。ちなみに、妻を亡くした夫は、妻の死後 13 日目から再婚が許される。

●寡婦になると…
寡婦の子供たちには正当な権利がないので、学校に行けない。その時子供は働きに出される。寡婦になると、強制的に他の土地に移住されることがある。寡婦になるのは、不自然な状況、人の道からはずれた者とみなされる。

●立ち上がる女たち
過酷な人生を強いられながら、自分たちの力で社会を変革をしようと立ち上がった寡婦たちがいる。NGO 団体が独自に寡婦の家チャハリ（大きな木）を建てた。ここでは 200 人の寡婦が職業訓練、カウンセリング等を受け、自信をもって村に帰っていく。長い苦悶の日々を送った寡婦たちは、手をつなぎあって前進し始めた。夫の財産の譲渡を 35 年間待たねばならなかったが、今では 16 歳になるともらえるようになった。寡婦手当ては 60 歳から支給されるが、これを切り上げるよう運動をしている。彼女たちの将来計画は、ネットワークを広げた村での改革である。

彼女たちの活動はネットでも見られます。
Women for Human Rights (WHR)
ウェブページ www.whr.or.np

事務局だより



2006 年度総会と講演会のお知らせ

4 月 23 日（日）に横浜市金沢区「いきいきセンター」で、2006 年度 NBSA 総会と渥美資子の「現地活動報告」の講演会を行ないます。
この総会に先立って 4 月 15 日（土）に「かごしま市民福祉プラザ」会議室で、渥美資子の講演会を予定しています。詳しいことは後日連絡いたします。

2005 年度会費納入のお願い
NBSA の会計年度(2005 年度)も余すところ 1 ヶ月となりました。2005 年度会費未納の会員様には会費振込用紙を同封させていただきました。納入後にこの会報を受け取った方はご容赦ください。活動費のほとんどが、皆様方個々の会費によるものです。ご協力をお願いいたします。

本年度支援物資ご寄贈者　（2005 年 4 月～2006 年 2 月）
●ウォークマン：鹿児島北ロータリークラブ様２台、伊地知様 2 台、山口様 6 台
●カセットテープ：菅原様、木戸様、佐々木様、花輪様、山縣様、佐藤様、森川様、スタディーツァー参加の皆様
●カセットテープデッキ：大仲様代表（中島様、堀内様、宮本様）山縣様
● 点字本：美杉会様、シルバーカレッジ様、点字絵本の会様、マレーシア盲人協議会
●教材点字器セット：二十軒様
●機材、衣類その他：中村様、堀尾様、早坂様、斎藤様、ツァー参加の皆様
大変重宝させていただいています。ありがとうございました。

ウォークマン人気者！　引き続き寄贈をお願いします。
皆様のご協力を得まして、ウォークマン数台が集まりました。これは学生に貸し出し、授業の補助教材、小説の録音にしています。それでもまだ台数が足りません。よろしくお願いします。

Nepal Blind Support Association (NBSA)
Yoriko Atsumi　P.O.Box: 8974 PCN-111 Kathmandu, Nepal
Tel:977-1-4356-357　　E-mail: yorikonepal@hotmail.com

《日本の事務局》
〒890-0064　鹿児島市鴨池新町 27-1-1108 上田佳代子
Tel＆Fax：　099-258-6685　E-mail：ilte@at.sakura.ne.jp
NBSA HP ： http://at.sakura.ne.jp/~ilte/nbsa/

維持会費：個人会員年間 6,000 円　/ 法人会員年間 15,000 円

振込先　：郵便振替　01790-7-74222（ネパールの視覚障害者を支える会）